

「神を愛することと人を愛すること」(ヨハネ一 5・1〜5)

1 愛弟子ヨハネ^{まな}

ヨハネの手紙は聖書に三通残されています。第一の手紙を書いたのは「ヨハネによる福音書」を書いたヨハネです。ヨハネによる福音書には、ちようど画家が自分の絵の中に密かに自画像を残したりするように、ヨハネ自身の姿が描かれています。彼はペトロらと共に最初に弟子として召された一人です。二人の弟子の中で一番年少の人物で——二十代前半——、そのためもあつたでしょうか、主イエスからとくに愛され、また信頼されていた人でした。イエスの「愛する弟子」という言い方で、ヨハネという名前は伏されて登場してきます。彼とイエスの関係を示す代表的な場面が二つあります。一つは(13章)有名な最後の晩餐の席でのこと、ヨハネはイエスのすぐ隣に座っていました。この中に裏切る者がいるとのイエスの発言に一同がざわつく中で、だれのことを指して言ったのか、イエスに聞いてほしいと、ペトロがヨハネに合図を送ります。するとヨハネは「イエスの胸もとに寄りかかったまま」でその人はだれのことですかと尋ねると、イエスは、わたしがパン切れを浸して与えるのがその人だと、この最年少の弟子に真実を明かしています。もう一つ(19章)はイエスが十字架につけられたとき、その十字架上からイエスが、愛する弟子ヨハネを指して、母マリアに「ごらんなさい、あなたの子です」と言い、ヨハネには、マリアを指して「見なさい。あなたの母です」と言っています。そしてこの福音書には、そのときからヨハネはマリアを自分の家に引き取ったと書いてあります。

かくも深く愛され、信頼されていたヨハネが書いた主イエスのいわば伝記、それがヨハネによる福音書であり、その彼が、イエス亡きあと、教会のもっとも重要な使徒の一人として——この手紙に出てくる言い回しを使えば——「偽り者」や「偽預言者」が現れ真実の福音が脅かされる中で、諸教会に、そしてそこに生きる信徒たちに宛ててしたためたのがこの手紙です。

こうした主イエスとの深い関わりが、じっさい福音書にも、この手紙にも、反映していないはずがありません。厳密に数えたわけではありませんが、愛(アガペー)という言葉がヨハネ福音書の中に他の福音書の何倍も多く使われ、現れます。ヨハネの手紙で「愛」が最も重要な主題であることは、今日お読みした数節を見る限りでも明らかであるように思います。

福音書から一、二引用すれば、たとえばこうです、「神は、その独り子をお与えになつたほどに、世を愛された」(3章16節)。「あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」(13章34節)。「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛

はない」(15章13節)。

ヨハネの手紙から、とくに今日の箇所の一つ前の4章から引用すれば、たとえばこうです、「愛する者たち、互いに愛し合いましう。愛は神から出るもので、愛する者は皆、神から生まれ、神を知っているからです」(5節)。「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして御子をお遣わしになりました。ここに愛があります」(10節)。「神は愛です」(16節)。「神を愛していると言いながら兄弟を憎む者がいれば、それは偽り者です。目に見える兄弟を愛さない者は、目に見えない神を愛することができません」(20節)。これらの愛を巡る聖句からヨハネの愛に関する考えの輪郭を少しでも描くことができたら幸いです。

2 愛について

さて愛とは、そして聖書の愛(アガペー)とは何でしょうか。愛ということで私どもはどういうことを思い浮かべるべきなのでしょう。

それを考えるために、愛とは人間の一つの感情なのだろうか、仮に問うことから始めてみます。感情というのは、何かに反応して起こるものです。怒りがそうですし、悲しみも喜びも一般にはそうです。愛もそうなのでしょうか。愛が何かに反応して生まれるとすれば、その次に考えなければいけないのは、その愛という感情を引き起こす対象ということになります。そしてそれをつきつめて行けば、たとえば自分に愛がないのは、自分の愛を呼び起こしてくれるだけの対象となるものがないからだというようなことになります。さて神の愛のことを考えてみます。聖書がくり返し伝えているのは、神は神のほうから私ども人間を愛してくださいということ。人間が神の側の愛を引き起こす対象でないことは言うまでもありません。むしろ私ども人間は神に背いた、そうした意味で弱く愚かしい罪人であったのです。そうであるにもかかわらず神がこれを愛してくださいとすれば、神において愛とは何かに反応して起こる感情のようなものではなくて、むしろ一つの意志、一つの決意と言わなければならぬのです。対象が、相手が、どんな状況にあったとしても、その相手と共にある、その相手と共にあるとする、そうしたはつきりした意志、それが聖書の言う愛、アガペーなのです。愛とはたんなる感情ではない。それゆえ一時の感激や熱狂ではない。むしろそれが醒めたときに、はじめからあったものとしてそこに残るものです。神の愛は神が人と共にあるとするそのご意志であり、決意です。それは神が永遠であるゆえに、神の永遠のはじめからの決意であり、これから先も永遠に取り消されることのない決意なのです。

この決意に触れたときに、人間の中に、私ども人間において、それにお応えする思いが生まれます。

先週ペトロの手紙を取り上げ、ペトロの信仰についても少し述べました。彼は、十字架への歩みを前にして主イエスが、弟子たちに、君たちはわたしにつまづくだろうと語られたとき、たとえみんながつまづいても私だけはつまづきません、たとえ死ぬことになってもあなたを知らないなどは申しませんと決意を表明しました、にもかかわらず、おそらくその六〜七時間後でしょう、イエスの仲間であること、弟子であることを否定し、信仰の挫折を経験します。彼がそこから立ち直ったのはイエスの復活のあとです。復活の朝、墓の中で、女たちが天の使いに会い、この使いからイエスの復活が告げられ、女たちは驚愕し恐ろしさに半ば正気を失いながらも、言われた通り、墓から戻って、弟子たちに、イエスの復活を告げます。その時の主の使いの言葉はこうです、「イエスの弟子たちに、そしてペトロにも伝えなさい」。ペトロにも、です。イエスの復活の使信はその弱さのゆえに主を裏切ったペトロにも、いなペトロにこそ伝えられるべきです。そこに神の決意があらわになっていきます。ペトロと共にあろうとする、この変わらない神の意志、これが愛です。そしてそれに触れたときにペトロの中に主イエスと共にあることへの決心が生まれたのです。この決心はもはや十字架の道を歩むイエスの前で披瀝したあの人間的な決意と同じではない。他がみんなつまづいても自分だけはつまづかないという空回りした決心ではありません。それはなるほど静かな決心です。内面から沸き起こる、しばしば表に出ることのない決心です。しかしそれはペトロにあって後に殉教として現れることになった決意でした。神の愛が、かくて神への愛を呼び起こします。それはまた、多くの人びとへの愛として広がって行くべきものです。

3 神を愛し人を愛すること

キリスト教の愛の教えにおいて大切なことは、神の愛によって呼び起こされた神への愛は、そのまま、他人（ひと）への愛、隣人への愛へと広がって行く、広がって行かねばならないということです。神への愛と他人（ひと）への愛は一直線につながっている一つの神の愛の運動です。福音書に伝えられているように、すでに主イエスご自身がその結びつきを明らかにしています。全身全霊をもって神を愛することと全身全霊をもって隣人をも分のように愛することを、神のもっとも重要な掟として示しておられます。それが私どもキリスト者の人生の不変の指針です。ヨハネの手紙一もそのことを強調しています。「神を愛していると言いながら兄弟を憎む者がいれば、それは偽り者です。目に見える兄弟を愛さない者は、目に見えない神を愛することができません」。目に見えない神を愛することは目に見える兄弟姉妹を愛することと一つだということです。そのことが今日の私どもの5章1節以下でも独特の言い回しで語られています。

生んでくださった方を愛する人は皆、その方から生まれた者をも愛します。このことから明らかのように、わたしたちが神を愛し、その掟を守るときはいつも神

の子供たちを愛します。

ここの「生んでくださった方」というのは私も信仰者を「生んでくださった方」という意味ですから、神のことを指します。「その方から生まれた者」とは私どものこと、信仰者としての人間のことです。兄弟姉妹と言ってもよいし、またこの箇所別の言い方に従えば「神の子供たち」です。要するに、神を愛する人は、等しく神から生まれた人、私どもの兄弟姉妹を愛するという意味です。

ところで神を愛するということは、神が愛しておられるものを愛するということでもなければならぬのではないのでしょうか。私も誰かを好きになつたら、その人は好きだけれども、その人が好きな人は嫌いだということは、あるかも知れませんが、そうなるとその人が本当に好きなのか、少し疑わしい。神を愛するというときも同じです。神を愛するとは神が愛しておられる人を愛するということです。そしてその中に私どもがあまり好きでない人も含まれてくるということです。

ある神学者の伝記で、次のようなエピソードを読んだことがあります。この人が小さなグループの対話の会に加わっていたときのこと、一人の婦人がこう質問したのです。「先生、私が永遠に救われるとき、私の愛する人たちと、きつとまた再会することになるのでしょうか」と。この神学者はとっさにこう答えたということです、「どうぞ覚悟を決めてください。きつとあなたの愛する人たちとだけではありませんよ!」。まことに鋭い受け答えだと思えます。私どもは神の国で私どもが愛していた人だけ会うことになるのではないのでしょうか。

このことを私どもは、この一人の婦人のようにそれでは困ると考えるのでしょうか、それともそれは本当に素晴らしいことだと考えるのでしょうか。私どもは人間として神ではありませんから、神のように全部を愛することはできません。しかし神様は全部を愛しておられるのです。世を愛しておられるのです。よく考えれば、だからこそ、その中の一人として、この私も愛されたということです。この罪深い私も、キリストのあがないによって、神の愛に結ばれているのは、神様がみんなを愛してくださったからなのです。そのように考えれば私どもは、みんなを愛せないこの私も神の広い愛の中に置かれていることを感謝せざるをえないだけでなく、何よりもそうした神の愛の広さを感謝すべきなのです。こうした神の広い愛の中であって、たとえすぐに好きになれない人とも、何かぎこちなくなる人とも、神の愛の同じ対象として認められていることが分かれば、私どもの愛の乏しさを私どもは少しでも克服していくことができるように思います。すぐには愛せなくても、その人の不幸を願ったりはしない、少しでも他者に対する私どもも持っている冷酷さを緩和していく、自分にしてほしくないことは、やっぱりしない、そういうところに導かれていくように思います。キリスト信仰を固く保ち、聖霊の助けによって、祈りつつ、世にあつてキリストに従う道を共に歩んでまいりましょう。

(2018年4月22日)

